様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１８３７

研究課題名（和文）中等度認知症高齢者の家族のためのレスパイトケアモデルの開発に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental research toward developing the respite care model for family caregivers of people with moderate dementia

研究代表者
坂梨　左織（Sakanashi, Sayori）

福岡大学・医学部・講師

研究者番号：２０５６９６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中等度認知症の人の家族介護者に対するレスパイトケアモデルの確立を目指し、在宅で認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメント尺度を開発することを目的とした研究である。概念分析、及び家族介護者へのインタビュー調査からエンパワメントの構成要素を抽出し、4下位尺度36項目の尺度原案を作成した。探索的因子分析によってエンパワメントの評価尺度を開発した。本尺度には、認知症の人の家族介護者の特性や、日本の家族介護者の特徴を示す因子が含まれており、日本における在宅で認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメントの特徴や変化を評価できることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an Empowerment Scale for Home-Based Family Caregivers of People with Dementia in Japan for establishment of a respite care model for them. We identified components of empowerment among family caregivers of people with dementia through interviews and the result of concept analysis. The first version of the questionnaire had four subscales and a total of 36 items. Exploratory factor analysis identified the validity of the scale. The scale includes factors covering the main characteristics of family caregivers of people with dementia in Japan, and therefore enables a more accurate assessment of empowerment of family caregivers of people with dementia.

研究分野：高齢看護学、家族看護学

キーワード：認知症　エンパワメント　家族介護者　尺度開発

１．研究開始当初の背景

日本は高齢化率が世界で最も高く(United Nations World Population Prospects, 2017)、2025年には65歳以上高齢者の約5人に1人が認知症であることが推計されている(Cabinet Office, Government of Japan, 2016)。認知症は脳の障害に伴う中核症状に加え、妄想・徘徊や抑うつ状態などの行動・心理症状が生じることがある。介護を担う家族はこれらの症状に対応しなければならず、ストレスや鬱状態などの身体心理状態に陥ることが報告されている（Moreno et al，2015．Välimäki et al，2015）。日本は歴史的に「家を守る」意識が強く、家族間の絆を重要視する。また、日本人特有の「親孝行」の考え方が受け継がれ、介護役割を社会規範としてとらえる傾向がある（森岡，2011）。そのため、介護に孤軍奮闘し、身体的、心理的、社会的に追い詰められている現状がある。特に、中等度（日常生活自立度Ⅱa～Ⅲa）認知症高齢者は、日常生活がある程度自立しているため在宅生活が可能とされる一方で、徘徊行動がみられるなど一時も目が離すことができない。そのため、家族の身体的・精神的負担が一段と大きく、介護負担軽減や燃えつきを予防し、在宅生活を継続するためのレスパイトケアが求められている。

エンパワメントは、人の肯定的な側面に着目した概念で、マイノリティや女性といった社会的弱者の地位向上に焦点を当て、彼ら社会的弱者の潜在能力を発揮させ、平等で公平な社会の実現を目的とする（フレイレ,1979）。これは、家族介護者の身体面や精神面に作用し、対処方法の獲得や負担の軽減といった効果をもたらすことから、その有用性が注目されている。したがって、家族介護者のエンパワメントに注目し、レスパイトケア確立に向けた支援を構築することは有用である可能性がある。

先行研究では、エンパワメントプロセスを明らかにした研究（Che,2006）がある。また、エンパワメントを高めるための介入研究（Klug,2014．Nomura et.al, 2009.）も行われている。だが、認知症の人の家族介護者のエンパワメントを評価する指標は確立しておらず、介入の効果が正確に評価されていない。また、既存の尺度は、小児の親（Koren,1992）や、疾患や国の異なる家族介護者を対象にしており、在宅で認知症の人を介護する日本の家族介護者のエンパワメントを評価することはできない。エンパワメント評価尺度を開発することによって、これまで看護者が主観的に評価していた家族介護者のエンパワメントを、客観的・数量的に評価することができる。これにより、看護者は、早期に家族介護者の心理学的変化を発見することができる。また、これら評価項目を、家族介護者のための看護介入の視点として応用することができる。

【文献】

United Nations. (2017). World Population Prospects: The 2017 Revision. New York: United Nations. Retrieved from https://www.un.org/development/desa/publications/world-population-prospects-the-2017-revision.html

Cabinet Office, Government of Japan. (2016). 2016 Annual Report on the Aging Society. Retrieved from http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_2_3.html.

Moreno, J. A., Nicholls, E., Ojeda, N., De los Reyes-Aragón, C. J., Rivera, D., & Arango-Lasprilla, J. C. (2015). Caregiving in dementia and its impact on psychological functioning and health-related quality of life: findings from a Colombian sample. *Journal of Cross-Cultural Gerontology, 30*, 393–408.

Välimäki T. H., Martikainen J. A., Hallikainen I. T., Väätäinen S. T., & Koivisto A. M. (2015). Depressed spousal caregivers have psychological stress unrelated to the progression of Alzheimer's disease: A 3-year follow-up report, Kuopio ALSOVA Study. *Journal of Geriatric Psychiatry and Neurology, 28*, 272–280.

森岡清美、望月嵩（1997）新しい家族社会、97、培風館、東京

Che, H. L., Yeh, M. L., & Wu, S. M. (2006). The self-empowerment process of primary caregivers: A study of caring for elderly with dementia. *Journal of Nursing Research, 14*, 209–218.

Klug, M. G., Halaas, G. W., & Peterson, M. L. (2014). North Dakota assistance program for dementia caregivers lowered utilization, produced savings, and increased empowerment. *Health Affairs, 33*, 605–612.

Nomura, M., Makimoto, K., Kato, M., Shiba, T., Matsuura, C., Shigenobu, K.,…Ikeda, M. (2009). Empowering older people with early dementia and family caregivers: a participatory action research study. *International Journal of Nursing Studies, 46*(4), 431–441.

Koren, P. E., DeChillo, N., & Friesen, B. J. (1992). Measuring empowerment in families whose children have emotional disabilities: A brief questionnaire. *Rehabilitation Psychology, 37*, 305–321.

２．研究の目的

本研究の目的は、中等度認知症の人の家族介護者に対するレスパイトケアモデルの確立を目指し、家族介護者のエンパワメントを高める支援の構築に向けた示唆を得ることである。基礎的研究として、在宅で認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメント尺度を開発することを目的とした。

３．研究の方法

第 1 段階：家族介護者のエンパワメントに関する国内外の文献レビュー/成人・高齢者を介護する家族介護者のエンパワメントの概念分析

（１）文献レビュー

‘family empowerment’ and ‘caregiver’ or ‘significant others’をキーワードに ‘English’ ‘Japanese’ ‘adult’で絞込み検索したところ、Pub Med205 件、CINAHL20 件、Scopus331 件の文献が抽出された。医中誌 Web 版 Ver.5 で「エンパワメント」and「家族」or「介護者」をキーワードに「小児」を除外した原著論文を検索したところ 126 件であった。このうち重複・体裁が整っていない文献を除外した 620 件のタイトルと抄録を精読して、小児の親を対象としたものやエンパワメントに焦点化されていないものを除外し 23 件が抽出された。さらに二次文献から得た 7 文献を追加し 30 件を分析対象とした。分析項目は発表年、著者の所属国、目的、対象者及び介護対象者の属性、方法（研究デザイン、評価指標、介入方法）である。

（２）概念分析

Rogers の革新的概念分析の方法を用いて 1995 年から 2015 年の 30 文献を分析対象とした。文献を通読して、著者が概念をどのように使用しているかを理解し抽出した。次に概念の特性は何かを明らかにするために、「概念の例が起こったとき何が起きたか」、「その前には何が起きたか」、「その後には何が起きたか、概念の結果としては」の問いのもと、属性、先行要件、帰結に関する記述をカテゴリー化した。そして、それぞれのカテゴリーを構造化し概念図を作成した。さらに、同じ概念を表現するために互換的に使われる関連概念を特定した。

第 2 段階：在宅で認知症の人を介護する日本の家族介護者のエンパワメントの構成要素の抽出と構造化

調査期間：2015 年 10 月から 2016 年 3 月

対象者：認知症の人と家族の会の「つどい」に参加する家族介護者と認知症と関わりの深い医療・福祉の専門職。対象選択にあたっては、理論的サンプリング（Flick, 2011）を行った。対象者は、性別や仕事の有無といった多様なタイプを選択した。日本では、親子間や配偶者間で介護が行われることが多い。そのため、介護者と要介護者の関係性からサンプリングを行った。また、認知症のタイプによって特徴的な症状が異なる。よって、タイプの異なる認知症のサンプリングを行った。さらに日本は、医療・福祉サービスの種類が多様である。したがって、サービスの異なる専門職者のサンプリングを行った。

調査方法：半構成的インタビュー。

調査内容：家族介護者には、年齢、介護中の仕事の形態、認知症の人との関係、同居している家族員、認知症の人の病名、介護期間、介護を始めたときから現在までの認知症の人の様子と自身の介護経験、そのなかで、うまく自分の力を出せた、発揮できたと感じた場面、認知症の人に対する気持ち、周囲や社会に対する気持ちを尋ねた。

医療・福祉の専門職者：年齢、職種、認知症の人とその家族と関わる場所、これまで関わった認知症の人の家族介護者のなかに、うまく自分の力を出している、
発揮していると感じた場面を尋ねた。

分析方法：The qualitative content analysis process (Elo & Kyngäs,2007)の手法を参考とし、質的記述的に分析した。

第 3 段階：在宅で認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメント尺度の信頼性・妥当性の検証

（１）尺度原案の作成

第 1・2 段階の結果を踏まえ 36 項目のアイテムプールを作成し、内容妥当性、表面妥当性の検討の結果、4 下位尺度 36 項目の尺度原案を作成した。

（２）信頼性・妥当性の検討

調査期間：2017 年 4 月から 12 月

対象者：2 つの県の大学病院の外来、在宅療養支援診療所などの医療施設 5 か所、デイサービスや地域包括支援センターなどの在宅福祉施設 13 か所に通う家族介護者。

調査方法：2 段階による無記名自記式質問紙調査（調査 1、調査 2）

調査内容：家族介護者及び認知症の人の属性、尺度原案、日本語版認知症介護自己効力感尺度、精神健康度調査票。

分析方法：統計ソフト SPSS24.0J、AMOS24.0J を使用し、まず尺度原案で得られた仮説モデルの適合度を確認的因子分析で検討した。モデルが適合していなかったため、全項目について項目分析を行った。信頼性の検討には、Cronbach’s α 係数を算出した。妥当性の検討には、探索的因子分析を行った。基準関連妥当性の検討には、尺度間の相関係数を算出した。尺度のモデル適合度を確認的因子分析で検討した。安定性の検討のために調査 1 と 2 の項目間の級内相関係数を算出した。

４．研究成果

（１）在宅で認知症の人を介護する日本の家族介護者のエンパワメントの構成要素の抽出

① 文献レビュー/概念分析

30 文献の著者の所属国は、北米・豪州 53%、香港・中国等の東アジア 47%であった。対象者の続柄は配偶者 57%、子ども 53%等で、義娘・嫁 3 件は東アジアでのみ見られた。介護対象者の属性は成人・高齢者 27%、認知症の人 23%、脳外傷・脳疾患患者 23%、精神障害をもつ人 10%等であった。研究方法は質的研

究 50%、量的研究 47%で、うち 33%が介入研究であった。このうち、エンパワメントの「定義あり」が 37%、「定義なし」が 63%であり、概念が不明確なまま調査・介入が行われていた。エンパワメントの評価指標は情緒障害の小児の親用の尺度を用いた文献が 13%と最も多く、自作の尺度 10%等であった。これらから、家族介護者が配偶者や子どもといった立場で介護を行っているにも関わらず、小児の親用の尺度が用いられており、対象者の特性に応じた評価が行われていないことが明らかになった。特に、成人・高齢者を介護する家族介護者のエンパワメントの概念が明確化されていないことが明らかになった。

次に、概念分析の結果から、6 つの属性、5 つの先行要件、5 つの帰結が抽出された。そして、成人・高齢者を介護する家族介護者のエンパワメントの概念を、「自己の心身を良好にコントロールし、肯定的な感覚を養ったり介護役割を主体的に捉えたりして介護力を向上させ遂行すること。また、自己のみならず他者にも目を向け、要介護者の自立を支えたり周囲と関係性を構築したりすること。」と定義できた。さらに、エンパワメントの関連概念として ‘coping’、‘self-efficacy’、‘autonomous’、‘self-determination’が抽出された。

② インタビュー調査

対象者は、家族介護者 5 名（平均年齢 70.8 歳）、医療・福祉の専門職 5 名（平均年齢 48.6 歳）であった。認知症の人との関係は、配偶者、息子、娘であった。認知症の型は、アルツハイマー型、前頭側頭型、脳血管性、若年性であった。介護期間は 2 年半から 16 年であった。

エンパワメントの構成要素として、33 のコード、12 のサブカテゴリー、4 つのカテゴリーが抽出された。

認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメントは、時間経過を横軸、エンパワメントレベルを縦軸とした構造で説明できた。特に日本の認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメントは、一方向に進むという単純化した構造ではなく、認知症介護の本質の理解を軸にして一進一退を繰り返しながら螺旋状に高まっていくという特徴をもっていた。また、日本の認知症の人の家族介護者がエンパワメントのプロセスを辿るためには、自ら認知症介護の本質について気づき理解することが重要なことが明らかになった。

以上のことから、これらの要素は、認知症の人の家族介護者のエンパワメントの評価や、エンパワメントを高める介入の視点として有用である可能性が示唆された。

（2）在宅で認知症の人を介護する日本の家族介護者のエンパワメント尺度の信頼性・妥当性の検証

調査 1 では、質問紙を 820 名に配布し、回収率は 37.4%、有効回答者数は 304 名（有効回答率 37.1%）であった。家族介護者の平均年齢は 65.2 歳で、約 70%が女性であった。約半数が配偶者で、義理の娘が約 10%を占めていた。介護期間は、2 年～5 年が最も多かった。約 60%が無職だった。約 70%に介護を助けてくれる家族がおり、約 80%に介護について相談にのってくれる家族がいた。認知症の人の平均年齢は 80.4 歳で、約 60%が女性であった。介護レベルは、中等度が最も多かった。認知症のタイプは、アルツハイマーが約 60%で最も多く、わからないと答えたものが約 15%いた。

まず項目分析を行って、次に探索的因子分析、信頼性の検討、基準関連妥当性の検討、モデル適合度の検定、安定性の確認を行った。結果は、COSMIN の checklist（Mokkink et.al, 2010）において、内的一貫性、信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を満たし、信頼性と妥当性を確保できたと考えられた。また、本尺度は、認知症の人の家族介護者の特性や、日本の家族介護者の特徴を示す因子が含まれていた。したがって、日本における在宅で認知症の人を介護する家族介護者のエンパワメントの特徴や変化を評価することが可能である。

【文献】

Mokkink, L. B. Terwee, C. B. Patrick, D. L. Alonso, J. Stratford, P. W. Knol, D L. Bouter, L. M. De Vet, H. C.W.(2010). The COSMIN checklist for assessing the methodological quality of studies on measurement properties of health status measurement instruments: An international Delphi study. Quality of Life Research.19,4, 539-549.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①Sayori Sakanashi, Kimie Fujita (2017). Empowerment of family caregivers of adults and elderly persons: A concept analysis. *International Journal of Nursing Practice. 23(5)*. doi: 10.1111/ijn.12573.（査読有）

〔学会発表〕（計 2 件）

①Sayori Sakanashi, Kimie Fujita. Empowerment Structure of Family Caregivers of Persons with Dementia. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars. 2017年3月. Regal Riverside Hotel, Shatin (Hong Kong)

②坂梨左織、藤田君支、家族介護者のエンパワメントに関する文献レビュー、第 36 回日本看護科学学会学術集会、東京、2016 年 12 月、東京国際フォーラム（東京）

６．研究組織

(1)研究代表者

坂梨　左織（SAKANASHI, Sayori）
福岡大学・医学部・講師
研究者番号：２０５６９６４４

(2)研究分担者

藤田　君支（FUJITA, Kimie）
九州大学・医学研究科・教授
研究者番号：８０３１５２０９

西尾　美登里（NISHIO, Midori）
福岡大学・医学部・助手
研究者番号：２０７６１４７２
（平成 28 年度より研究分担者）